

# 世界各国の産業用ヘンプ

第52回

## パキスタン

### イスラーム教国での合法化と生産の推奨

赤星 栄志 あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院にて産業用ヘンプに関する研究により博士号(環境科学)を取得。99年よりヘンプの可能性と多様性に注目し、日本の大麻草に関する伝統文化復興と麻の研究開発に携わる。現在、日本大学生物資源科学部研究員などに在職。主な著書・編著に「ヘンプ読本」「大麻草解体新書」「大麻という農作物」がある。

パキスタン・イスラーム共和国は、インドの西部に位置し、2億2000万人を有する世界第5位の人口大国だ。非常に若い世代が多く、人口の55%は35歳以下が占める。国土面積は日本の約2倍で、中央にインダス川が北から南へと縦断している。国土の大半が乾燥帯なため灌漑設備を伴う農業が盛んで、コメや小麦、トウモロコシなどの穀類、野菜の生産と畜産、綿花を中心とした繊維産業が主要産業である。第二次世界大戦後にインドとともに英国から独立し、ヒンズー教徒が多数派のインドと別れて、イスラーム教徒中心の国家となった。

#### 聖典クルアーンで大麻は禁じられていない

同国北部はヘンプの原産地である中央アジアに接していることから、何世紀にも渡ってヘンプを栽培し、薬用、食用、宗教用に利用してきた。

7世紀の初め、預言者ムハンマドによって、アラビアでイスラーム教が成立し、根本聖典のクルアーン(コーラン)がまとめられた。クルアーンは、ムスリム(イスラーム教信者)にとって信仰の拠り所であると同時に生活の規範でもあり、イスラーム社会の根源となるものである。豚肉等の動物由来の食材を使わないハラール食品は、聖典を含めたイスラーム法で規定されている。

この聖典には、酒類による酩酊が禁止されているが、ハシシ(大麻)については明記されていない。ムハンマドが生きていた時代には、ハシシの酩酊があまり知られていなかったからと見られている。

イスラーム社会でハシシを広めたのは、イスラーム教のスーフイズム(神秘主義)といわれている。イスラーム法を学んだ法学者ウラマーの指導による形式的なものに反発する形で、10〜11世紀に流行した。スーフイズムは、宗派としてはではなく、多種多様な教団として今日まで存在し、ハシシを宗教上の儀式として扱ったことで、10世紀以降の読み物や詩歌にハシシの素晴らしさを伝える逸話が散見される。世界的に著名な千夜一夜物語(アラビアンナイト)にも複数箇所に登場することから、13世紀頃の庶民の生活に広まっていたと考えられている。

聖典のなかでハムル(khamr)は酒類を指していたが、法学者ウ

図1：聖典クルアーンの「ハムル」の記載箇所(食卓章第5章90節・91節)

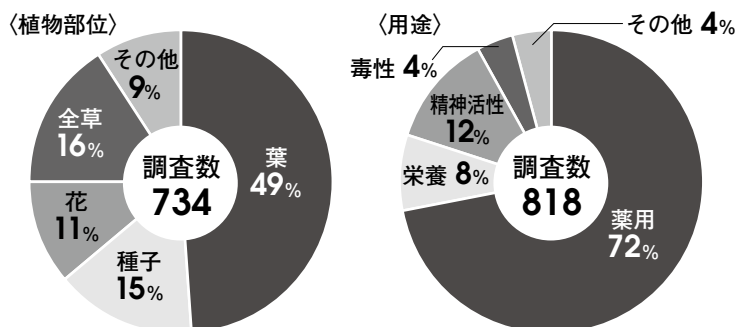
- 5-90：あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。恐らくあなたがたは成功するであろう。
- 5-91：悪魔の望むところは、酒と賭矢によってあなたがたの間に、敵意と憎悪を起こさせ、あなたがたがアッラーを念じ礼拝を捧げるのを妨げようとすることである。それでもあなたがたは慎まぬのか。

出典：『日垂対訳注解聖クルアーン』(2002年・日本ムスリム協会発行)

ラマーは精神を麻痺させるあらゆる酩酊物質が入るものと解釈して、ハシシの宗教上の違法性を唱えるようになった。しかし、当時のムスリムの医師たちがハシシを喘息、淋病、便秘の治療や毒物の解毒剤に使っていたことや、ハシシが身体を蝕むことを客観的に証明できなかつたことから、ハシシの普及を止める方法を見つけられなかつた。

以降、法学者の禁止方針をあまりにも長く無視し続けてきた結果、預言者が禁止したのは酒類だけだという考え方が庶民の間に根付いてしまった。聖典の現代日本語訳を見ても「ハムル」は、「酒」となっている(図1)。20世紀にな

図2：民族植物学調査によるパキスタンでの植物部位別・用途別のヘンプの利用状況



出典：http://cannusedb.csic.es

### 植物部位は約半分が葉で用途の7割が薬用

スペイン政府が支援した41カ国の大麻草の民族植物学データベース研究によると、同国でのヘンプ利用は植物部位別では葉の利用が最も多く、次に全草、種子、花の

って大麻の嗜好利用の是非を巡って米国で議論するようになったことを、イスラーム社会では13世紀の時点で、聖典の禁止解釈を巡って議論していたのである。

97年麻薬法に基づく01年の麻薬物質規則では、ハシシが対象物質となっていた。しかし、20年9月に連邦内閣が医療用・産業用ヘンプの国産化と商業化を承認し、同規則に基づいて、マリファナの主成分であるTHC濃度が0・3%未満のヘンプの栽培許可権を科学技術省に与えた。ヘンプの管轄が、産業・生産省でも麻薬統制省でもないのは世界的に極めてユニークである。

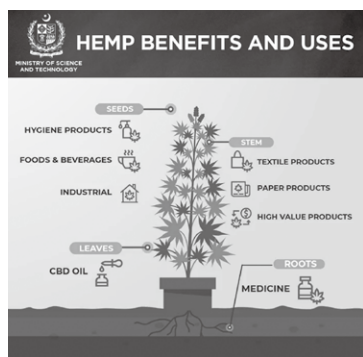
同省傘下のパキスタン科学産業研究評議会(PCSIR)が応募を開始した「産業用、医療用、その他の科学目的のためのヘンプ」

### 財政赤字と苦戦する経済の特効薬としての期待

順で続く。用途では薬用が最も多く、精神活性(宗教儀式)、栄養補給、そのほかに薪、ランプ、餌、緑肥、害虫除去等である(図2)。

なお、庶民の間での日常的な利用とアーユルヴェーダ医学による医療利用があったため、パキスタンは1961年麻薬単一条約においてインド等とともに嗜好用大麻の規制に25年間の猶予を与えられた国の一つだった(本誌20年3月号参照)。

図3：ヘンプの利点と用途



出典：パキスタン科学技術省のTwitter (@MinistryofST)

バリユーチェーン開発プログラム」は、5年間にわたって、①屋外農場の繊維・種子の活用、②屋外農場の薬用、③屋内農場の薬用の3つの分野で、それぞれ最大10haの農場に5年間の栽培免許を与える内容だ。並行して首都イスラマバードに隣接するラワルピンディ市にあるPMAS乾燥地農業大学との研究プロジェクトも開始した。また、国民にヘンプへの理解を深めるために、同省はSNSを使ってヘンプの利点と用途を解説する動画などを積極的に配信している(図3)。

これらの取り組みを主導したのは、上院議員で科学技術大臣を務めたファワード・チャウダリー氏だ。同氏は「財政赤字と苦戦する経済を、ヘンプの薬効で改善するべく、ヘンプの合法化と生産を奨励した」と話している。全世界

図4：科学技術大臣シブリ・ファラス氏の視察の様子(写真中央)



出典：http://www.uaar.edu.pk

で250億ドル(約2兆7500億円)規模の市場拡大が予想されるCBD(カンナビジオール)に注目し、参入により10億ドル(1100億円)の経済効果を上げるといふ目標を明言している。

チャウダリー氏から引き継いだ現・科学技術大臣のシブリ・ファラス氏は、21年12月にPMAS乾燥地農業大学のヘンプ農場を視察し収穫作業の体験を行なうなど、国内外にパキスタンの新産業になることをアピールした(図4)。また、繊維産業が盛んな国として、環境負荷の高い綿花の代替原料として持続可能なヘンプの生産・利用も視野に入れており、今後の展開が注目される。